

氏 名	中平 洋子
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 53 号
学 位 記 番 号	看博第 12 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	精神障がい者の家族の Family Resilience に関する研究 Research on <i>Family Resilience</i> in Families of People with Mental Disorders
論 文 審 査 委 員	主査 教授 野嶋 佐由美(高知県立大学) 副査 教授 長戸 和子(高知県立大学) 教授 田井 雅子(高知県立大学) 教授 時長 美希(高知県立大学)

論文内容の要旨

研究目標：精神障がい者を家族員にもつ家族の Family Resilience の特性を明らかにする。

研究方法：研究デザインは、質的記述的研究。対象は、精神障がい者を内包する家族。データ収集方法は、半構造化面接。家族会、医療機関、保健センター、就労を支援する施設に家族の紹介を依頼した。データ収集期間は、2012 年 12 月～2014 年 7 月。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にして行った。高知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果および考察：19 家族より研究の協力を得た。面接への協力者は、病者の父親、母親、姉であった。面接時間は、27～131 分、平均 90.8 分であった。病者の診断名は統合失調症（17 名）と感情障害（2 名）であり、家族が病者の世話を続けている期間は、1～5 年未満 2 家族、5～10 年未満 3 家族、10～15 年未満 2 家族、15～20 年未満 2 家族、20 年以上 9 家族、期間不明 1 家族であった。

精神障がい者の家族の Family Resilience として、6 つのコアカテゴリーとそれらを構成する 24 のカテゴリー、73 の概念が明らかになった。6 つのコアカテゴリーは、【家族の守り】【コントロール】【社会に向かって家族を開く】【病気との対峙】【認知の転換】【希望】であり、これらのコアカテゴリーは、互いに関連しあっていた。

精神障がい者の家族の Family Resilience は二つの局面から成り立っていた。第一の局面は、Living System として、上位システムである社会の影響を受けながら【家族の守り】、状況の【コントロール】を行いながら、【社会に向かって家族を開く】ことであり、Living System 力の発現であった。社会との相互作用によって傷つきもし、救われもしていたが、家族を取り巻く環境を変化さるべく上位システムに働きかけていた。

第二の局面は、家族員が長期に渡る健康問題を抱えたという状況に対して、時間経過や上位システムとの関係性の中で、【病気との対峙】【認知の転換】【希望】を持つ力、つまり家族内のエネルギーを創生するような Competency の発現であった。家族は、家族員の病気を家族なりに扱えるようになるだけではなく、厳しい状況の中に留まり奮闘し続けることを励ましたり、奮闘する意味を見いだしていた。

結論：精神障がい者の家族の Family Resilience は、6 つの特性から構成されることが明らかにな

った。精神障がい者の家族の Family Resilience とは、「精神障がい者を抱えた家族が、困難状況と向き合うために、【家族の守り】、状況【コントロール】を行いながら、【社会に向かって家族を開（く）】き、【病気との対峙】、【認知の転換】、【希望】を持つという家族としての力を獲得・発揮し、家族として時々の調和を獲得し続けることであり、このように奮闘した軌跡を家族史に組み込むことである」と定義づけることができた。

Family Resilience を促進するために、奮闘している家族の力を信じること、家族システムを上位システムとの相互作用の中で支援すること、家族の力の創生を支援することが必要であると考えられた。

審査結果の要旨

本研究は、精神障がい者とその家族が地域で家族としての暮らしを営み続けることを可能とする支援方法を探究してきた中平氏の長年のテーマに根付いている。脆弱性・困難性を有する家族として捉える傾向にある精神障がい者の家族の力に注目し、新しい Family Resilience の概念に基づいて研究に着手しており、独創的である。Resilience の概念分析を基盤に、それを Family Resilience へと拡大適応し、さらに精神障がい者の家族への適用可能性を慎重に検討するという学術的な過程を辿っている。

本研究では、家族の体験からその意味を抽出する面接を行った上で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考としてデータ分析を行っている。その結果として、精神障がい者の家族の Family Resilience として、6つのコアカテゴリーとそれらを構成する24のカテゴリー、73の概念を明らかにした。

本研究の独創的な発見は、Family Resilience は、【家族の守り】【コントロール】【社会に向かって家族を開く】【病気との対峙】【認知の転換】【希望】の構成概念から成る事を明らかにした点である。これらの成果は、精神保健医療福祉領域の臨床実践の場で有効に活用できる。Family Resilience を査定する際に、また支援方法を考案する際に、【家族の守り】【コントロール】【社会に向かって家族を開く】【病気との対峙】【認知の転換】【希望】の6つの視点は欠かせないものとなるだろう。

さらに、この研究成果に基づいて、精神障がい者の家族の Family Resilience は‘Living System 力の発現’と‘家族内のエネルギーを創生する Competency の発現’に基づいていることを提案している点もまた、本研究の独創的な点である。すなわち、Resilient 家族は、Living System として、上位システムである社会の影響を受けながら、【家族の守り】、状況【コントロール】、【社会に向かって家族を開（く）】き、適度に揺らぎながら社会というより大きなシステムの中で存続することが出来るように奮闘している。また、Resilient 家族は、時間経過や上位システムとの関係性の中で、【病気との対峙】【認知の転換】【希望】を発動させて、家族内のエネルギーを創生する Competency を発揮している。

しかしながら、研究の成果は、病の軌跡が比較的長期にわたる家族からのデータが中心であり、そのために、今後さらに研究を継続して発展させていくことを期待する。

以上のことから、本審査委員会は、「精神障がい者の家族の Family Resilience に関する研究」は学位授与に値する研究論文であり、学位申請者 中平洋子氏が、博士（看護学）の学位を授与される資格があるものと認めた。